

岩井喜代仁 プロフィール

1947年京都府生まれ。民間の薬物依存症社会復帰施設 茨城ダルク及び女性シェルター代表を務める傍ら、筑波大学の非常勤講師も受け持つ。自ら薬物依存に陥り、ダルクにて回復プログラムを終了後、茨城県結城市にある茨城ダルク今日一日ハウスに勤務、現在に至る。

1996年宮城県仙台市に仙台ダルクを開設、1999年福島県耶麻郡北塩原村に磐梯ダルクを開設、2000年茨城県鹿島郡神栖町に鹿島ダルクを開設。2001年秋田県仙北郡協和町に秋田ダルクを開設。2002年滋賀県大津市にびわこダルクを開設。2008年富山県富山市に富山ダルクを開設。

1997年スペイン・サンタンデル・アルゴミリヤの薬物依存回復施設、プロジェクト・オンブレに研修。



自らのスタッフ経験から、24時間ケアの施設の必要性を厚生労働省や関係者に訴え、社会福祉法人化を目指すも地元住民の反対により断念。精神保健福祉センターや保護観察所、学校等にて啓発メッセージに立ち、精力的に活動拠点を広げる。全国各地の依頼に応じ、講演活動中。民放、NHKなどメディアにも出演、新聞などにも取りあげられている。

2010年 茨城県福祉部長賞受賞

2012年 茨城県知事賞受賞

著書 「わが魂は仲間と共に」

「回復への実践録-生まれ変わり人生を取り戻す」

どう出版

茨城ダルク 今日一日ハウス

施設の役割

- 薬物依存症、アルコール依存症などの民間のリハビリ施設 プログラムを提供する施設です。

・依存症はWHOが認めた『病気』であり、一度依存症になってしまうと治癒は不可能な病気ですが、専門のプログラムを受けることにより、治癒は不可能だが回復は出来るので、施設に入寮し共同生活をしながらプログラムを受け回復を目指す施設であり、入寮者に対してプログラムの提供をする施設です。職員、スタッフ全員が依存症者の当事者で、依存症者の気持ちが理解でき入寮者の気持ちに沿ってプログラムを提供する施設。入寮期間は1年半から3年です。

- ・1年半～3年程度、NAの12ステッププログラムを中心に学び、規則正しく健康的な生活が送れるようにする施設

- 「生活訓練」と「生活の立て直し」を行う施設です。

・薬物やアルコールなどの長期使用によって不規則な生活になり、怠惰な状態になってしまった体と精神を依存者ではない人たちが一般の生活でしていることを入寮者も同じように普通のこと普通に行えるようにしていく施設です。また、金銭管理も出来ない人も多く、一日決まった金額を支給し、その日の金額をその日のうちに使う練習や金銭管理を行う施設

・薬物やアルコールなどの長期使用によって傷んだ体と精神を、プログラムや精神病院の受診や一般病院の受診で回復させ、薬物やアルコールなどの長期使用によって社会から隔離された生活から、ボランティア活動などを通して社会と触れ合うことによって社会に徐々に慣れてもらい、再び社会参加ができるようにする施設

施設の回復プログラム

NA（ナルコティクスアノニマス）ミーティングへの参加 (ダルクのプログラムの中で一番重要)

NA ミーティングは世界 139 か国で週 67,000 以上のミーティングが行われている薬物依存者のための「自助グループ」です。茨城県でも NA ミーティングは開催されていて、それに継続的に参加し、ミーティングの参加の習慣をつけます。NA ミーティングは毎日参加します。

自助グループとは、薬物など何らかの問題抱えた人たちが、お互いに支え合い、その問題を乗り越えようとする集団で NA、AA、GA、などがあります。

NA が提供する 12 ステッププログラムを実践し、依存症から回復を図り、それを行う施設です。

NA ミーティング参加の効果としては、ミーティングで正直な話をしたり話を聞いたりすることで、お互いの共感を得たり気づいたりし、問題の解決と回復を図ることです。例えば、薬物の衝動や他の衝動、薬物へのとらわれごとや他のとらわれごと、依存者ならではの感情に気づくこと、問題になっていることとその解決方法などをミーティングに参加し続けることによって共感し気づいていき解決と回復を図ることなどです。

NA ミーティング参加の習慣をつけておくと、プログラムが終了し社会に戻っても習慣がついていれば NA ミーティングに参加しやすくなり、NA ミーティングに参加すれば薬物の問題や社会で起きる問題を解決するきっかけになり、薬物の再使用が防ぎやすくなります。

NA はインターネットで NA と検索し「NA について | ナルコティクスアノニマス日本」を開くと【ナルコティクスアノニマス日本】のホームページが検索することができます。そこで「NA について」や、ミーティング会場の情報等が閲覧できます。また NA では PI 活動と言って広報活動を行っています。活動先は行政機関（役所、保護観察所、保健所、保険センター等）、医療機関にも行っています

2 ダルクミーティング

・NA ミーティングの練習としてダルクミーティングを行う意味があります。12ステッププログラムの勉強のためのステップミーティングも行います。

・ダルクミーティングにはハウスミーティングというものがあり、週間スケジュールや施設の役割などの決め事をスタッフや入寮者と一緒に決めます。通院の要望や施設生活の注意事項なども話し合います。回復の初期段階では自己中心的で自身の要求や要望が多く、その見極めも行います。

3 施設生活における役割やボランティア活動や作業

・施設の中で入寮者に役割を持ってもらいます。例えば、食事係や運転係や当日の掃除や朝食係などです。これは「生活訓練」の一環で、自己中心性が強い依存者にとって協調性や社会性を身につけるための練習となります。あと、やりたくないことや苦手なこと辛いことを薬物やアルコールなどの使用で逃避してきたので、それらと向き合う為のプログラムでもあります。また、ボランティア活動や作業で協調性や社会性を身に付け社会参加する練習や役割と同じように辛いことと向き合うプログラムでもあります。

・全般的に薬物依存者は薬物使用により罪悪感が強く、また社会不適合者として扱われてきたり、過去のトラウマや、薬物使用の原因となった人格的な性質により自己肯定感が低いとされていますが、役割を持ち責任感や達成感を得、人のためになることをすることで自己肯定感を高めます。

4 スポーツや遊び、団体行動 NA や他ダルクとの分かち合い

・薬物やアルコールなどで鬱積した気持ちやストレスをごまかし、薬物やアルコールなどの使用以外の楽しみ方を忘れてしまった入寮者に対し、スポーツや遊びのなかで鬱積した気持ちやストレスの解消方法、薬物やアルコールなどを使わないで楽しむ方法を学んでもらいます。また、スポーツや遊びなどで達成感を得、自己肯定感を高めます。

・NA グループのイベントの参加や他地域のダルクとの交流もあります。交流するなかで依存者の回復のモデルとなる人との出会いや、同じプログラムを歩む仲間意識を高めることによって回復と成長を促します。

・スポーツや団体行動が苦手な入寮者もいますが、役割と同じように、やりたくないことや苦手なこと辛いことを薬物やアルコールなどの使用で逃避してきたので、それらと向き合う為のプログラムでもあります。また、依存症者は薬物やアルコールを孤独で使用してきたので団体で行動するのが苦手です。団体で行動（和太鼓等）をし、協調性を学び、回復を図ります。

5 スタッフ研修制度

・12ステッププログラムの概要に「回復を望んでいる薬物依存者の手助けをする」とありますが、これを回復が進んできた入寮者に対し施設からの提案をすることがあります。手助けすることによって依存症者特有の自己中心的な考え方を手放してもらい回復や成長を図ります。人のためになることをすることで達成感を得、自己肯定感を高めます。

・ダルクの事務所での役割ですが、スタッフ研修は職員ではなく社会に戻るための研修です。社会に戻る練習として業務の手伝いをしてもらいます。入寮者の手助けや一般社会と向き合い、触れることで社会性や良い人間関係の構築の練習をしてもらいます。

・スタッフ研修を行う入寮者は、他の入寮者との関係も深くなり人間関係の問題や課題が多くなります。その人間関係の問題や課題と向き合うことによってスタッフ研修自身の依存症者特有の歪んだ性格や性質を整え回復を図ります。

・全般的に薬物依存者は薬物使用により罪悪感が強く、また社会不適合者として扱われてきたり、過去のトラウマや、薬物使用の原因となった人格的な性質により自己肯定感が低いとされていますが、役割を持ち責任感や達成感を得、人のためになることをすることで自己肯定感を高めます。

6 共同生活

・共同生活によって寝食を共にし、同じ依存症を克服したい人間同士でプログラム受け、生活することによって孤独を避けます。依存者にとって孤独になると、薬物やアルコールなどの使用につながります。共同生活で孤独を避け共感や仲間意識を得て、共に回復していくという相互理解を高め回復を図ります。

・共同生活には監視の役割もあります。依存症は病気であり、克服したいと思っても、病気の症状として薬物やアルコールなどを使用したい衝動にかられるときもあります。そんなとき共同生活をしている人間がいることでそれが監視役となり再使用を防ぎます。

- ・薬物やアルコールなどの使用により人格的な歪みや依存者特有の性格になった依存者や、元から持っている人格の歪みや、元から持っている依存者特有の性格や性質が原因で薬物やアルコールなどを使用してきた依存者達と共同生活することによって、お互いが自分自身の姿を映し出す鏡として自分自身の問題に気づきそれに取り組むことと、お互いの歪んだ性格や性質、依存者特有の性格や病的な行動をぶつけあい、自分自身の問題を浮き彫りにすることによって、お互い自分自身の性格や性質を整え回復と成長を図り、「薬物を使う生き方」から「薬物を使わない生き方」へと生き方を変え、人格的な成長を促します。

- ・共同生活をすることによって自分より回復や成長できている入寮者の姿がよく見え、自分の回復と成長の手がかりをつかむきっかけや、それに気づくことができる

- ・職員、スタッフも共に共同生活をして入寮者のサポートを 24 時間体制で行います。

7 生活管理

- ・ダルクでの共同生活の起床時間は 6 時 40 分です。当日の掃除、朝食係はそれより早い起床です。8 時 30 分からダルクミーティングを行い、自分たちで食事の準備をし、午後のプログラムを受け、夕方から NA ミーティングに参加するため外出します。NA ミーティングに参加してダルクに戻るのが 21 時 30 分から 22 時です。消灯は 23 時です。このようにダルクでの生活スケジュールは、一般社会で仕事をしている人に近いスケジュールを組んでいます。プログラム終了後社会に戻った時に社会に対応できるようにしてあります。これもプログラム一部の「生活訓練」の一環として、今までの不規則な生活から規則正しい生活ができるようにするためです。

- ・入寮者の中には後遺症や障害で規則正しい生活や、掃除や洗濯や身だしなみに気を付けることなどが出来ない入寮者がいます。自分のことが自分で出来ない入寮者のために個別に指導します。

- ・プログラムを優先させるため一定期間は就労できません。自分自身の依存症の問題を徹底的に向き合ってもらいます。

- ・就労できないことと同じ理由でプログラムを優先させるためです。

- ・ダルクで共同生活するためにはいろいろな規則があります。規則は依存者である入寮者を依存者的問題行動の防止と再発予防のためです。このことを理解してもらい、規則を守るようにします。

ダルクがプログラム以外で提供するサービス

1 病院の通院と処方薬の管理

・薬物やアルコールなどの使用で傷んだ精神と体の治療のための病院の通院をサポートします。薬物やアルコールなどの使用の後遺症として精神的な不安や不眠、幻覚、幻聴、妄想状態などがあります。そんな症状がある入寮者に対し、連携している精神病院と協力しながら治療にあたります。精神的な治療にあたり常に入寮者の状態を把握する必要があります。その他の体調不良や後遺症としての内臓疾患、ケガなどに対して内科や外科、整形外科等の通院のサポートをします。

・病院への通院することにより、病院から処方薬が処方されます。特に精神科から処方される処方薬、精神安定剤や睡眠薬は依存者にとって依存薬の対象になります。受診の際、スタッフも一緒に診察室に入るなどして入寮者が依存状態にならないよう配慮します。また他病院の処方薬、特に鎮痛剤や総合感冒薬なども依存薬の対象になるため依存状態にならないよう配慮します。

・ダルクは薬物依存の回復施設です。病院から処方される処方薬も十分依存の対象になるので、なるべく処方薬を飲まない治療方法をとるように病院と連携しながら治療にあたります。

・ダルクの入寮者の中には処方薬依存の入寮者がいますし、病院に通院することにより処方薬依存になってしまう入寮者もいます。その入寮者に配慮するためにも事務所で処方薬を管理します。あと、後遺症などの発症で自分のことが自分で出来ない状態になっている入寮者は処方薬を自分で管理出来ないためダルクの事務所で処方薬を管理します。

2 NA ミーティングの送迎

・ダルクでは入寮者のNAミーティングに参加するために、ダルクの自動車を送迎します。NAミーティングが開催される会場が遠方にあたり、公共の交通機関を使うことが難しい会場が多いためダルクの自動車でNAミーティング会場を送迎します。NAミーティングがダルクのプログラムの中で一番重要なプログラムとなるためこれをかかさず行うように運営します。

3 交流会などの開催 勉強会などの参加

・社会はまだまだ依存者や依存症回復施設に対して偏見があります。その偏見を取り除いてもらい、依存者や依存症回復施設を理解していただくためにも地域住民の方や自治体の方との交流会を開催します。また、ボランティア活動などもダルクとして行えることは行い参加していきます。

・ダルクでは常に共同生活をしているので、共同生活がストレスにならないように数ヶ月に一度の割合で、他のダルクなどとの交流やイベントや研修会などを企画し開催します。また他のダルクなどが企画したイベントや研修会の参加もします。

・依存者や依存症回復施設の理解を深めるためや、ダルクのプログラムや実態、現在の依存症の実態を知ってもらうための広報活動としてフォーラムを開催します。

・依存症の治療やプログラム、治療実態を勉強するためにも他のダルクや病院や保健センターや各関係機関などで開催されるセミナーやフォーラムや研修会や研究会に参加します。

4 相談業務 広報活動 プログラム普及活動

薬物離脱指導活動 家族支援活動

・ダルクでは依存症者当事者の親族の会「家族会」へ参加し、家族の相談やプログラムの提供を行います。

・県内にある矯正施設が行っている薬物離脱教育に矯正施設からの依頼があれば参加協力します。

・精神保健福祉センター、精神病院などにメッセージ活動や家族への相談、依存者当事者への相談を行います。ダルクへ家族や当事者から直接相談があれば受けます。

・学校やその他の団体から薬物離脱指導などとして講演の依頼を受けます。

5 プログラム終了後の移動先の設定

・一定期間プログラムを受け、薬物やアルコールなどを使わない生活ができた入寮者は、就労して自立が可能なダルクに移動するか、在籍しているダルクで就労し自立を目指します。

・薬物やアルコールの使用の後遺症で依存症とそれ以外の精神疾患を患う重複障がいを持った入寮者は、障がい者施設への移動を検討します。また、後遺症はなく治療の過程で重複障がい認められたり、元から障がいがありそれが原因で依存症になった入寮者に対しても同じように依存症プログラムを受けた後、障がい者施設などの移動を検討します。

・入寮者の状態に応じてプログラム途中であっても他のダルクへ移動する場合があります。

茨城ダルク 今日一日ハウス 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
起床6:40 朝食7:00							
午前（八時～十時）	ダルクミーティング	ハウスミーティング	ダルクミーティング	ダルクミーティング	ダルクミーティング	ダルクミーティング	セルフケア
室内清掃・各役割当番等 昼食							
午後（一時半～三時）	DVD鑑賞 または ソフトボール	施設内清掃・洗車 町作り研究会（ボランティア）	海水浴（夏期のみ） ステップミーティング	太鼓練習（鹿窪体育館） スポーツプログラム	温泉プログラム	セルフケア	
夕食							
NAミーティング	古河会場（茨城） 乗国寺会場（茨城）	取手カトリック教会（茨城） 結城福音教会 会場（茨城）	水戸カトリック教会（茨城）	真岡カトリック教会（栃木） 下館カトリック教会（茨城）	つくばカトリック教会（茨城） 友部カトリック教会（茨城）	真岡カトリック教会（栃木） 土浦キリスト 教会（茨城）	小山カトリック教会（栃木） 結城 福音教会（茨城）
投薬 22:00 就寝 23:00							

◇NA の 12 の ステップ◇

1. 私たちは、アダイクシヨンに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
2. 私たちは、自分より偉大な力が、私たちを正気に戻してくれると信じるようになった。
3. 私たちは、私たちの意思といのちを、自分で理解している神の配慮にゆだねる決心をした。
4. 私たちは、探し求め、恐れることなく、モラルの棚卸表を作った。
5. 私たちは、神に対し、自分自身に対し、もう一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。
6. 私たちは、これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを、神にゆだねる心の準備が完全にできた。
7. 私たちは、自分の短所を取り除いてください、と神に求めた。
8. 私たちは、私たちが傷つけたすべての人のリストを作り、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持ちになった。
9. 私たちは、その人たち、または他の人びとを傷つけないかぎり、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
10. 私たちは、自分の生き方の棚卸を実行し続け、誤ったときには直ちに認めた。
11. 私たちは、自分で理解している神との意識的触れ合いを深めるために、私たちに向けられた神の意志を知り、それだけを行っていく力を、祈りと黙想によって求めた。
12. これらのステップを経た結果、スピリチュアルに自覚め、この話をアダイクトに伝え、また自分のあらゆることに、この原理を実践するように努力した。

● 出版案内 ●

薬物依存とその家族 回復への実践録 —生まれ変わり、人生を取り戻す—

何故これだけ怖い薬物に手を出したのか。その事が、真っ先に浮かんだ。自らも薬物依存に苦しみながら、依存症に真正面から向き合い、必死に戦っている岩井氏の信念と活動から見えてくるもの。人間とは何か、生きるとは何か、全ての人の必読書である。

岩井 喜代仁 著 ￥1800

わが魂は仲間と共に。～薬物依存回復施設 茨城ダルクの20年

ヤク中地獄から回復への道を、先頭に立ち引っ張ってきた実践哲学のバイブルである。

岩井 喜代仁 著 ￥1890

大丈夫。人は必ず生まれ変わる。

21年間自ら薬物依存に苦しんだ元ヤクザの組長（岩井喜代仁）。1700人以上の子を預かり、共に生きて再生への道を歩む。その壮絶な生き様と命のメッセージ。(絶版)

岩井 喜代仁 著 ￥1260

漂流の果てに —茨城ダルク 薬物依存者の回復—

常陽新聞社の記者（市毛 勝三）が、「薬物依存からの回復メカニズムを解き明かしたい」との思いで、茨城ダルク長期取材の末、常陽新聞にて計七十五回の掲載分を一冊の本にまとめ直したもの。

市毛 勝三 著 ￥1800

我ら回復の途上にて —茨城ダルク10年 心の居場所から—

茨城ダルクから育った若きリーダーたちは、社会に居場所を失った薬物依存症の人たちの救済のため全国に旅たった仙台・磐梯・鹿島・秋田……

そして2002年茨城ダルクは、社会福祉法人化の道を選択した。果たして、これは薬物依存から回復の道筋をつけたことになるのか？

全国のダルクの仲間たちが注目する。 市毛 勝三 著 ￥2000

放蕩息子—ある薬物依存者の記憶—仙台ダルク代表 飯室 勉自叙伝

クスリを使って、生きる事も死ぬ事も出来なかった14年。
プログラムを通して、回復と成長を学んで15年。

俺は今、生まれ変わって15才になった。 飯室 勉 著 ￥1600

拘置所のたんぼぼ —日本の成人「40人に1人」が覚せい剤乱用者—

薬物依存者のための民間初のリハビリ施設「ダルク」の創設者が薬物依存の実態と世間の誤解を語り、再起への道を指し示す。 近藤 恒夫 著 ￥1400

薬物依存を越えて —回復と再生へのプログラム—

社会から必要とされていない、役に立たないという「寂しさの痛み」から薬物依存は生まれる。 近藤 恒夫 著 ￥1600